益田市埋蔵文化財調査報告

鵜ノ鼻古墳群発掘調査概報Ⅱ

1986.3

益田市教育委員会

益田市埋蔵文化財調査報告

鵜ノ鼻古墳群発掘調査概報Ⅱ

1986. 3

益田市教育委員会

例　　言

1. 本書は、益田市教育委員会が益田市共栄農協の委託を受けて昭和60年度に実施した圃場整備事業に伴う鵜ノ鼻古墳群発掘調査（第２次）の記録である。

2. 調査は、益田市教育委員会が主体となり、次のような体制で実施した。

事務局	桐田泰治	（益田市教育委員会社会教育課長）
	森脇栄一	（　同　課長補佐）
調査指導	西尾克己	（島根県教育委員会文化課主事）
調査員	木原　光	（益田市教育委員会社会教育課主事）
作業員	岩崎善嗣　佐々木健一　渋谷源一	
	高橋好市　岩崎玉枝　岩崎とみ子	
	大石美枝子　大久保真紀　和崎幸子	

3. 調査実施にあたっては、土地所有者諸氏、益田市共栄農協組合経済部から終始多大な協力を得た。記して感謝する。

4. 挿図中の方位は、すべて調査時の磁北である。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 2

Ⅱ　調 査 の 概 要 …… 4
　1.　B－1号墳 …… 4
　2.　E－4号墳 …… 6

Ⅲ　お　わ　り　に …… 9

図　版　目　次

第1図　古墳群の位置と周辺の遺跡分布図

第2図　調査区配置図

第3図　B－1号墳出土遺物実測図(1)

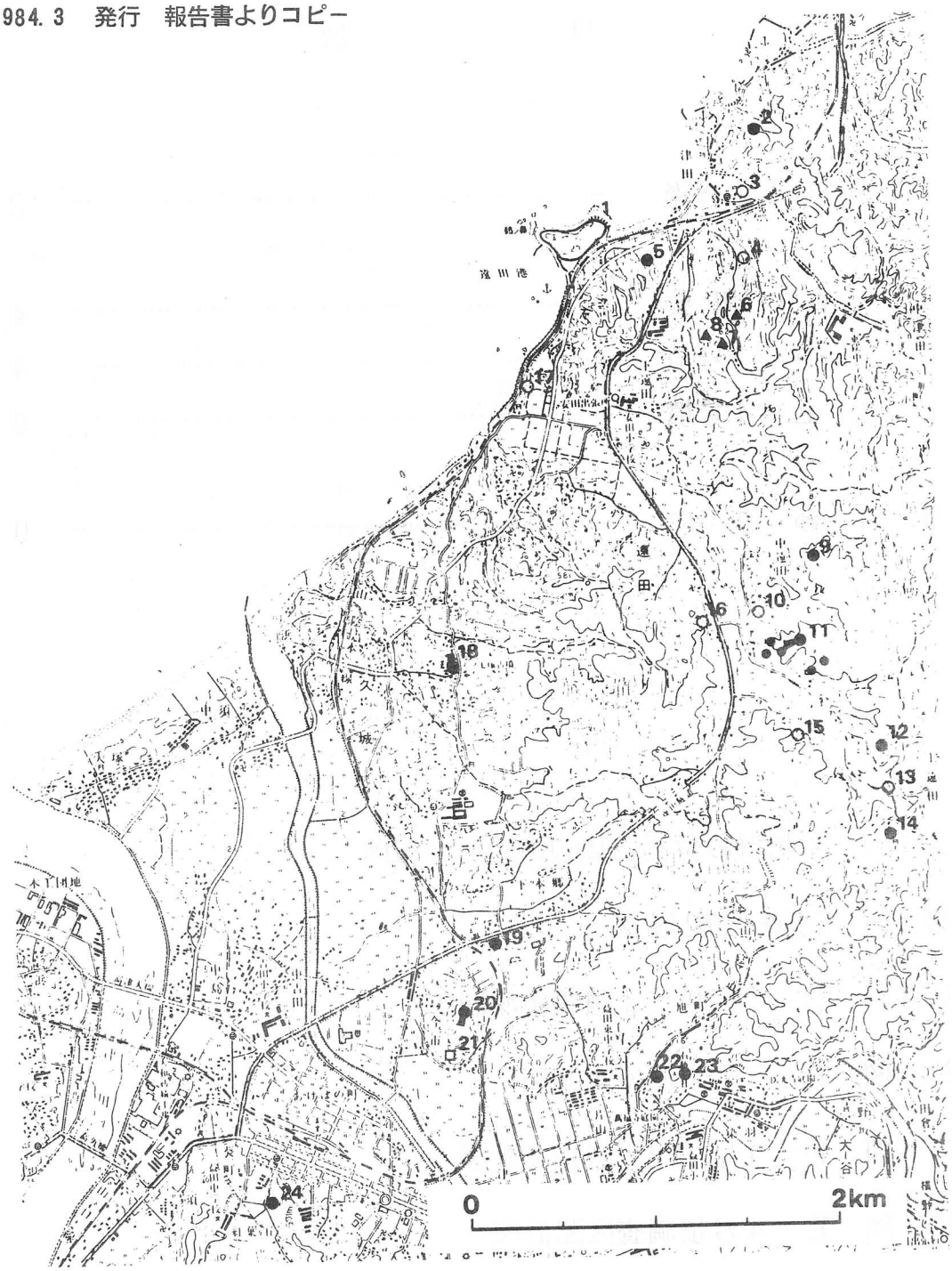
第4図　B－1号墳石室実測図

第5図　E－4号墳出土遺物実測図(1)

第6図　E－4号墳調査区配置図

第7図　E－4号墳墳丘断面図

1984. 3　発行　報告書よりコピー



1鵜ノ鼻古墳群　2峠山古墳　3水雲島遺跡　4日ヶ迫遺跡　5大道古墳　6杉迫窯跡　7桑ヶ迫窯跡　8本片子窯跡
9木原古墳　10神明遺跡　11大元古墳群　12石仏古墳　13二反田遺跡　14村山古墳　15三百田遺跡　16二葉遺跡
17スケ入道遺跡　18スクモ塚古墳　19四ッ塚古墳　20小丸山古墳　21吐屋上古墳　22片山横穴群　23秋葉山古墳　24北長迫古墳

図1　古墳群の位置と周辺の遺跡分布図

Ⅰ 調 査 に 至 る 経 過

昭和59年度に入り、鵜ノ鼻古墳群の位置する丘陵一帯に、数年来の懸案であった圃場整備事業が次第に具体化してきた。事業は、山陰本線の北側、県指定地域を除く丘陵のほぼ全域を対象に計画され、その総面積は12,000㎡に及ぶ大規模なものであった。

予定地内には、昭和58年度に国庫補助事業を受けて実施した鵜ノ鼻古墳群発掘調査によって、すでに12基の古墳が確認されていたため、これらの取り扱いをめぐり益田市教育委員会と事業主体となる益田市共栄農協組合との間で再三にわたり協議がなされた。その結果、丘陵の縁辺部に立地する古墳については極力保護に努めることで合意を得、事業の性格上計画の変更が困難な丘陵の中央寄りに点散する4基の古墳は、記録保存を目的として昭和59年度中に発掘調査を実施することとなった。

このような経過をふまえ、D－1号墳、E－1号墳、E－4号墳の各古墳は予定通り調査を終了したが、当初は円墳と考えられた残るE－4号墳については、調査を進めるにつれて前方後円墳の可能性が強まり、さらに、併行して行なわれたトレンチによる確認調査によってB地区で新たに古墳1基が発見されるなど、調査を続行するうえで大幅な内容の変更が生じてきた。その時点で、これら2基の古墳の取り扱いについて益田市教育委員会と事業者の間で再度協議が持たれたが、年度内の調査は困難と判断されたため、昭和60年度に継続して発掘調査を実施することとし、作業は一端中断された。

今年度の調査は、この古墳2基を対象として、昭和60年6月5日から7月31日までの2ケ月間を費して実施された。

1984. 3　発刊報告書よりコピー

図 2　調査区配置図

Ⅱ 調　査　の　概　要

B－1号墳　1985. 3発行　報告書コピー

昭和58年度に国庫補助事業を受けて実施した詳細分布調査ではB地区に古墳は確認されなかったが、今年度はさらにその事実を補強するためにトレンチを追加して調査を行なっている。なお、B地区の南は山陰本線災害復旧工事により一面に残土が敷かれている。

調査の結果、同地区の西寄りで緩やかな南向き斜面に1基の古墳が発見された。もとの地形はこの古墳の北側が段差をもって低くなっており、これは畑作によって削平されたものと考えていたため、トレンチを設定した当初の目的は旧地形を探る手がかりを得ることであった。

今年度の調査は旧トレンチをさらに南へ延長し、その東に巾1.0mのトレンチ東西方向に設けて実施している。その結果、トレンチの壁に盛土と思われる土層セクションがあらわれ、地表下約50cmで石室の掘り肩も確認された。そして、暗黒褐色土中から須恵器片も出土している。正確な規模は今のところ不明であるが、検出された一部の墳裾から推定して10m前後の円墳と思われる。

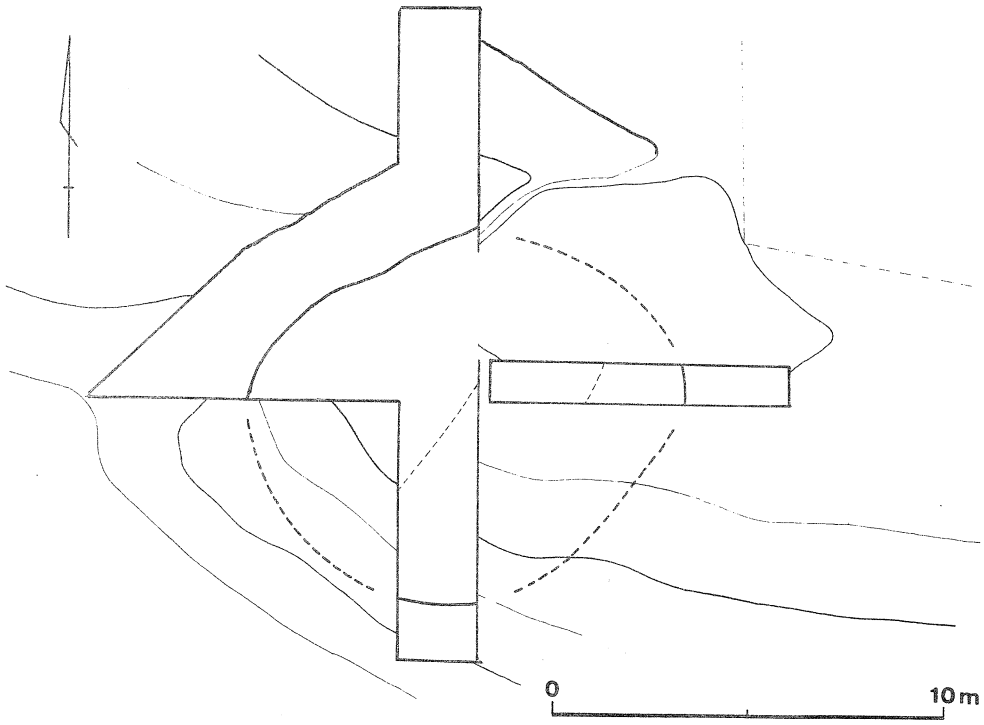
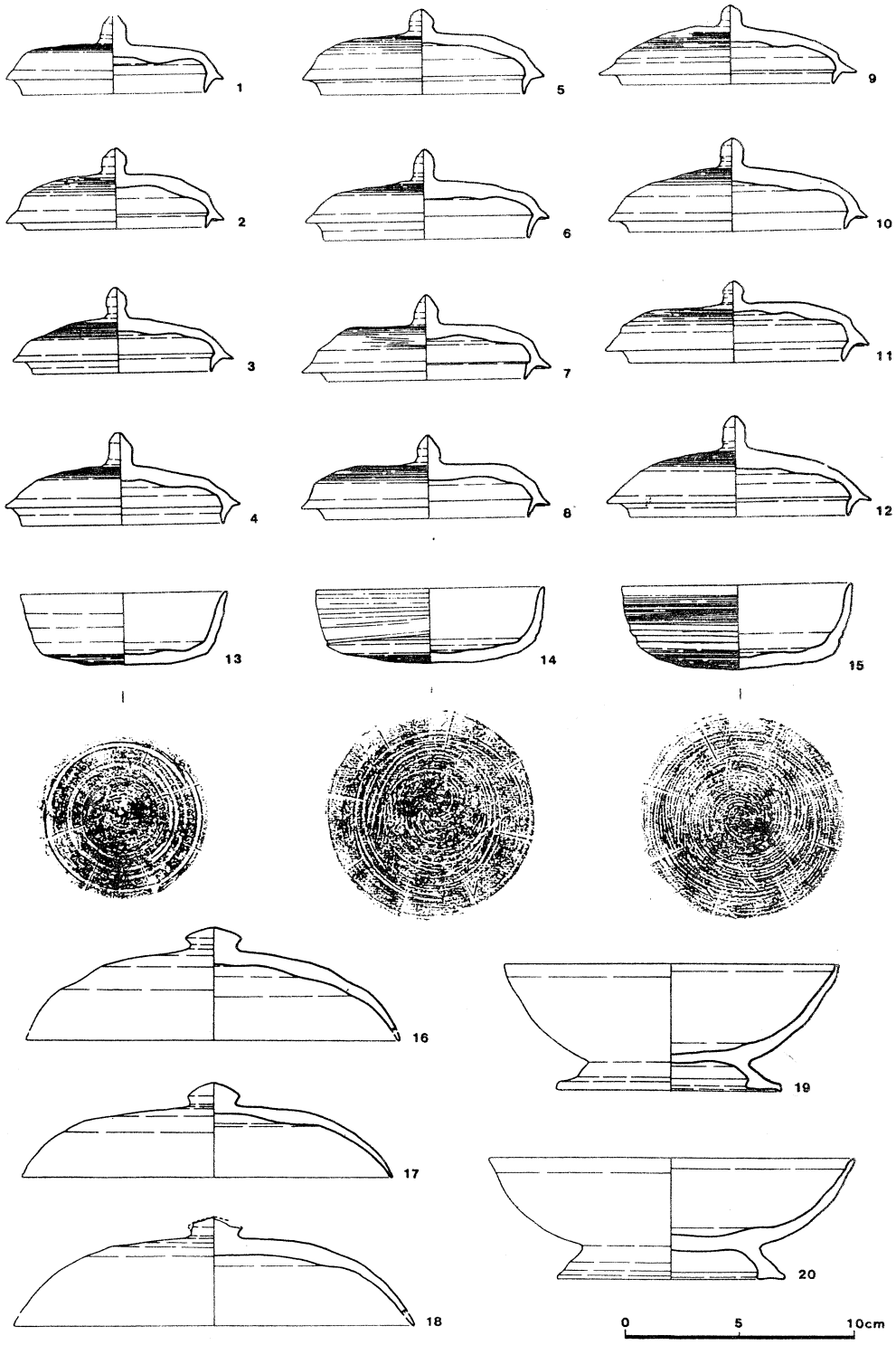
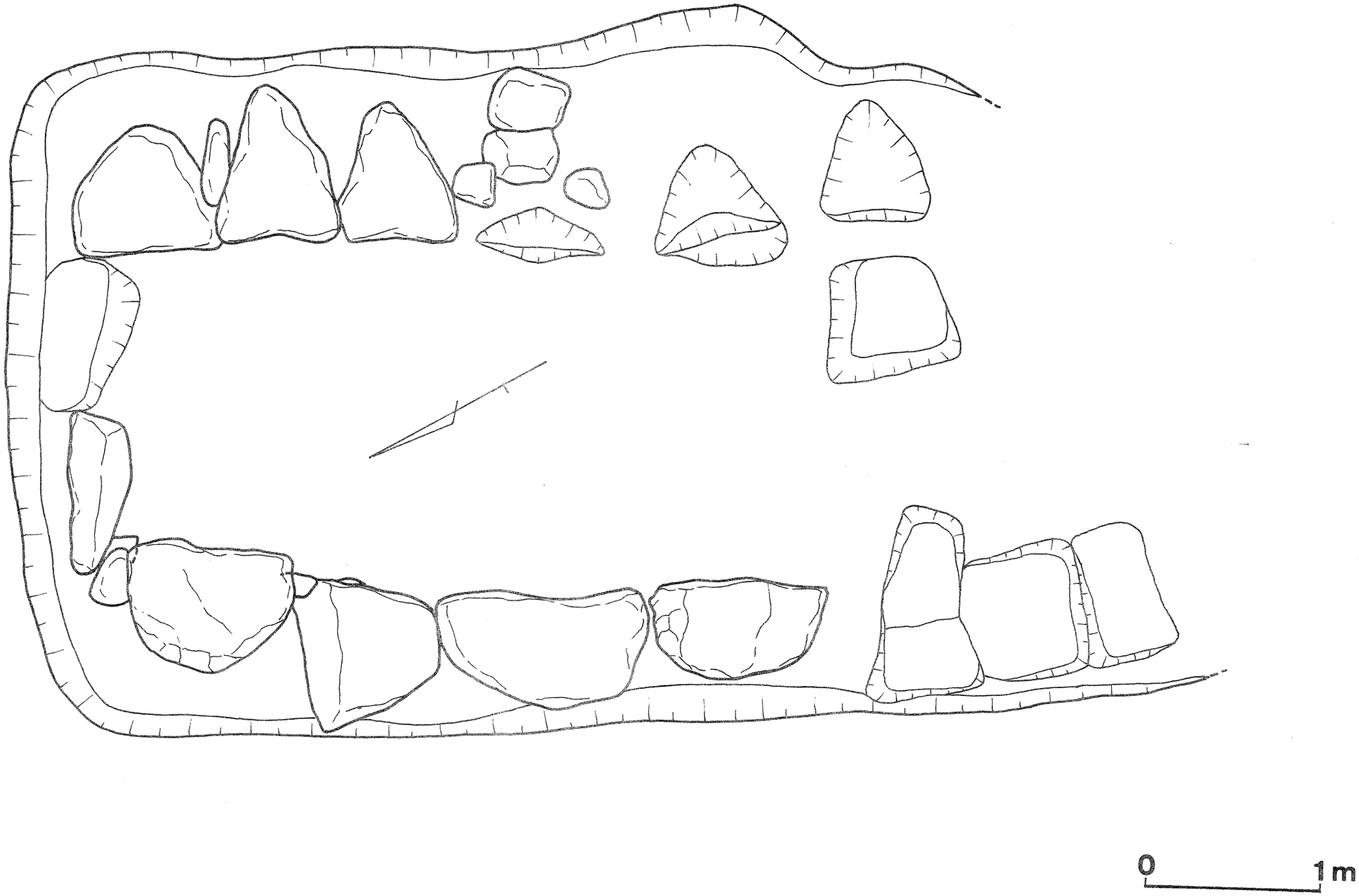


図5　B－1号墳調査区配置図



第３図　Ｂ－１号墳出土遺物実測図(1)



第４図　Ｂ－１号墳石室実測図

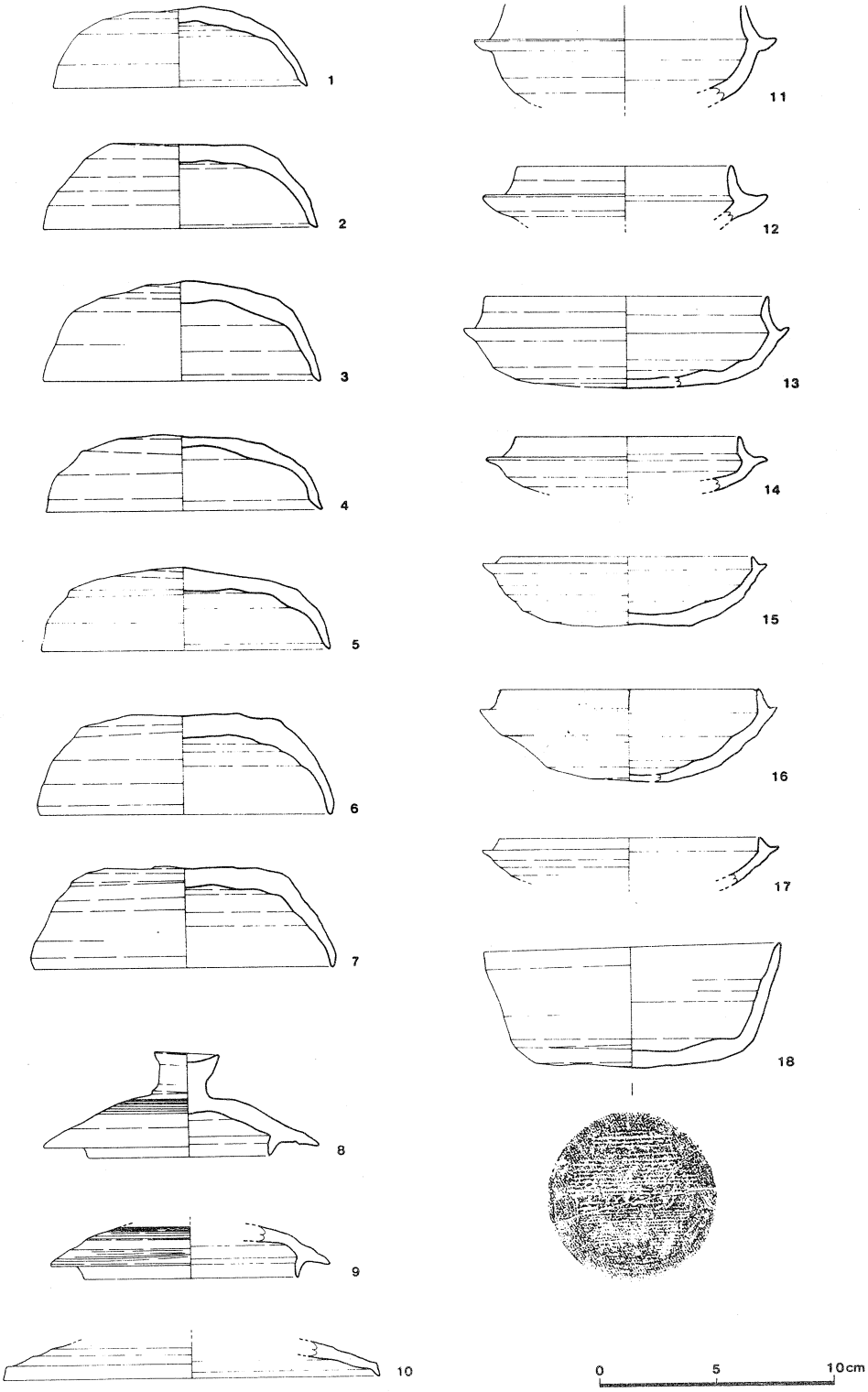
Ｅ－４号墳　1985.３発行　報告書よりコピー

59年度調査では西側に２本のトレンチを設定したのみであったが、今年度は全面発掘調査として着手した。当初は円墳と考えられたが周囲の発掘により前方後円墳の可能性も出てきたため、本古墳については別途協議として調査は中断している。継続調査は60年度の予定であるが、これまでの調査状況について以下に報告しておく。

昨年度の２本のトレンチのうち北のそれで古墳の裾が北へ伸びることがすでに指摘されているが、今回の調査区拡張により同様の状況が反対の東側にも認められた。さらに北端にあたると思われる地山の段差が一部検出されている。これらの事実をふまえ墳形を図上で復元したのが図15である。残存する墳丘の東側及び北側一帯が完掘されていないため断定は避けておくが、前方後円墳の可能性がきわめて強い。

古墳の規模は図上で、後円部径約12ｍ、前方部長11ｍを測り、その全長はおおよそ25ｍと思われる。さらに石室は西方向に開口していたと考えられ、同方向に須恵器片が多量に出土している。

須恵器片には蓋坏の他、小型の子持壷がある。図16に坏４を１点図化しておいた。これは立ちあがりが長くシャープな器形で、鵜ノ鼻古墳群の出土須恵器の中では比較的古い時期に相当するものである。須恵器の他にめのう製の勾玉が１点出土している。



第5図　E－4号墳出土遺物実測図(1)

1985. 3発刊　報告書よりコピー

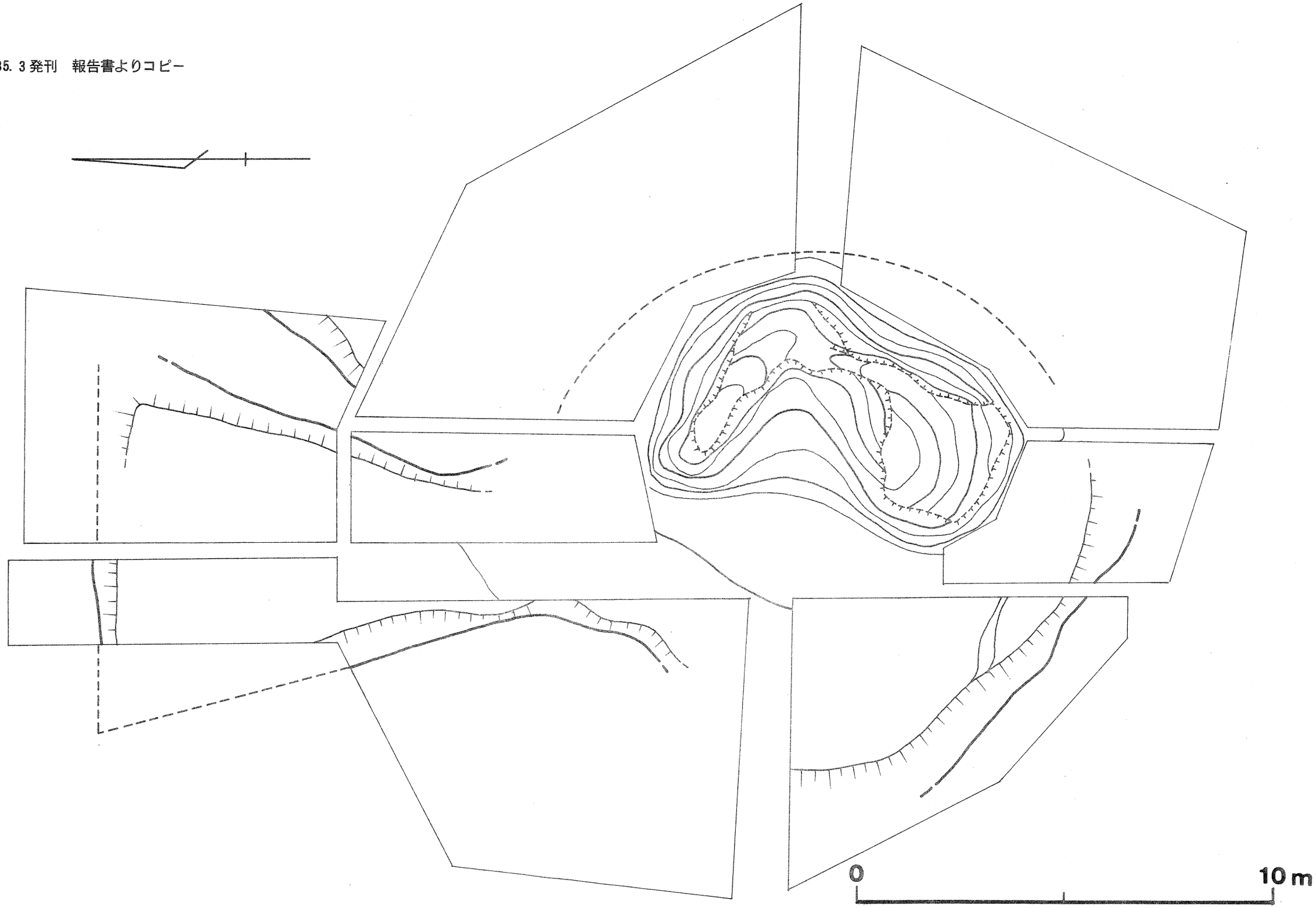


図6　E－4号墳調査区配置図

第７図　Ｅ－４号墳墳丘断面図

Ⅲ　お　わ　り　に

これまで調査の概要を述べてきたが、58年度に国庫補助を受けて実施した詳細分布調査と併わせて約1,700㎡を丘陵全体からすれば調査面積はわずかである。ここでは58年度調査の成果を再び整理し、加えて今回の調査で明らかにされたことを概観して一応のまとめとしたい。

58年度調査の目的は地表上にその痕跡が認められない丘陵部分で古墳の有無を確認することと、原形を失いながらもその形がいをとどめて点在する古墳の残存状況を把握することであった。

その結果でA～Fの6地区の中で、C地区で5基、D地区では2基、さらにE地区では5基の計12基の古墳を確認することができた。このうち、D－1、D－2号墳については石室の下部は比較的良く残っていると予想できたが他のものについてはかなり本格的な破

さらに、これらの古墳の多くが丘陵縁辺部に接するように次々と築かれており、これは壊を受けているのではないかという感触があった。

当古墳群における基本的築造パターンであり、当時古墳群を築いた人々の精神活動を反映していると考えられる。また、丘陵の中央部にあたるA地区とB地区において1基の古墳も発見されなかったのは重要なことであった。結果的には59年度調査によってB－1号墳が新たに発見されることになるのだが、丘陵全体の古墳の分布状態として考えればきわめて粗密が著しい。

遺物では、時期決定に重要となる蓋坏に限れば、いわゆるノミの刃状の立ちあがりを持つ坏が注意された。

以上のような成果が58年度調査で得られているが、今年度はさらに具体的かつ豊富な資料を加えることができた。

まず墳形については、D－1号墳、E－2号墳は円墳と考えて良い。E－1号墳は墳丘が完全に変形されてしまっており不明である。E－4号墳は前方後円墳と思われるが、今後の調査によって確実になれば古墳群全体をグルーピングするのに有効な資料となろう。

石室は概観してかなり本格的な破壊を受けているものが多い。一方でE－1号墳は天井石はすべて失われているもののその平面プランが明らかな貴重な古墳となった。その規模は小さい部類と言える。また、D－1号墳が礫床を有していることも注意される。またE

－４号墳も58年度の部分調査により礫床の可能性が示唆されている。

今回の調査では多量の須恵器が出土している。中でもつまみを付して外面にカキメを施す蓋がかなり出土している。これは内面のかえりの形状により少なくとも２種類に分類が可能である。また、蓋の端部が単純に下方に折れるものもわずかではあるが存在する。坏には、高台をもたない小口径のもの、高台の付くもの、さらに高くふんばる高台を有する三種がある。また、Ｅ－４号墳からは立ちあがりが長く上方に伸び、いわゆるノミの刃状立ちあがりをもつ坏とは異なる形式のものが出土しており、これは後者に先行する古い時期の坏がある。Ｅ－４号墳からはこの他にも古い様相を呈する須恵器が多いようである。

このように、須恵器はその諸特徴から少なくとも三型式にわたると思われるが、それらの実年代については資料整理の後に改めて考察することにする。

以上のような成果をふまえ、個々について詳細な検討を加え、さらに古墳群築造の過程を解明すべであろうが今回はそこまで至らなかった。後日に期したい。そして、Ｅ－４号墳及びＢ－１号墳については部分的な調査にとどまっているため、60年度に継続して調査を実施する予定であることをつけ加えておく。

参　考　文　献　一　覧

1　1924　野津左馬之助　『島根縣史』第三巻　島根縣史編纂掛

2　1941　矢富熊一郎　『安田村發展史』上巻　安田村図書館

3　1950　矢富熊一郎　『鵜ノ鼻古墳群』安田村公民館

4　1952　矢富熊一郎　『益田町史』上巻　益田公民館

5　1958　大川清　田中義昭　西垣丹三　「島根県益田市西平原窯址」『古代』29・30合合併号

6　1960　山本清　「山陰の須恵器」『島根大学開学10周年記念論集』

7　1963　矢富熊一郎　『益田市史』益田郷土矢富会

8　1963　山本清　池田満雄　近藤正　東森市良　『島根の文化財』第三集　島根県教育委員会

9　1966　池田満雄　「古墳文化の地域的特色－山陰－」『日本の考古学』Ⅳ 河出書房

10　1968　山本清　『新修島根県史』通史編１　島根県

11　1974　前島己基　「益田・北長迫横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅴ集

12　1975　矢富熊一郎　『益田市誌』上巻　益田市誌編纂委員会

13　1978　横山純夫他　『古代の石見』　八雲立つ風土記の丘資料館

14　1980　山本清他　『山陰古代史の周辺』下巻　山陰中央新報社

15　1982　田中義昭　「益田市西平原窯址群の意義について」『ふいーるど・のーと』No. 3　本庄考古学研究室

16　1982　勝部昭　房宗寿雄　『本片子遺跡・木原古墳』益田市教育委員会

17　1983　田中義昭　「石西地方における横穴墓の形態と時期」『山陰文化研究紀要』第23号　島根大学

図　　版

参考文献一覧

1 1924 野津左馬之助 『島根縣史』第三巻 [illegible]

2 1941 矢富熊一郎 『安田村發展史』上巻 [illegible]

3 1950 矢富熊一郎 『鵜ノ鼻古墳群』[illegible]

4 1952 矢富熊一郎 [illegible]

5 1958 大川清 田中[illegible] 『[illegible]市四平原窯址』『古代』29・30合合併号

6 1960 山本清 『山陰[illegible]』『島根大学[illegible]』

7 1963 矢富熊一郎 『[illegible]』[illegible]

8 1965 山本清 池田満雄 [illegible] 『[illegible]』第三集 島根県教育委員会

9 1965 池田満雄 『[illegible]地域的特色－山陰－』『日本の考古学』[illegible]

10 1966 山本清 『[illegible]』通史編1 島根県

11 1974 前島己基 『[illegible]』『島根県埋蔵文化財調査[illegible]』第一冊

12 1975 矢富熊一郎 『益田市誌』上巻 益田市誌編纂委員会

13 1978 横山純夫他 『古代の石見』 八雲立つ風土記の丘[illegible]

14 1980 山本清他 『山陰古代史の周辺』下巻 山陰中央新報社

15 1982 田中義昭 『益田市四平原窯址群の窯[illegible]』[illegible]第3 本庄考古学研究室

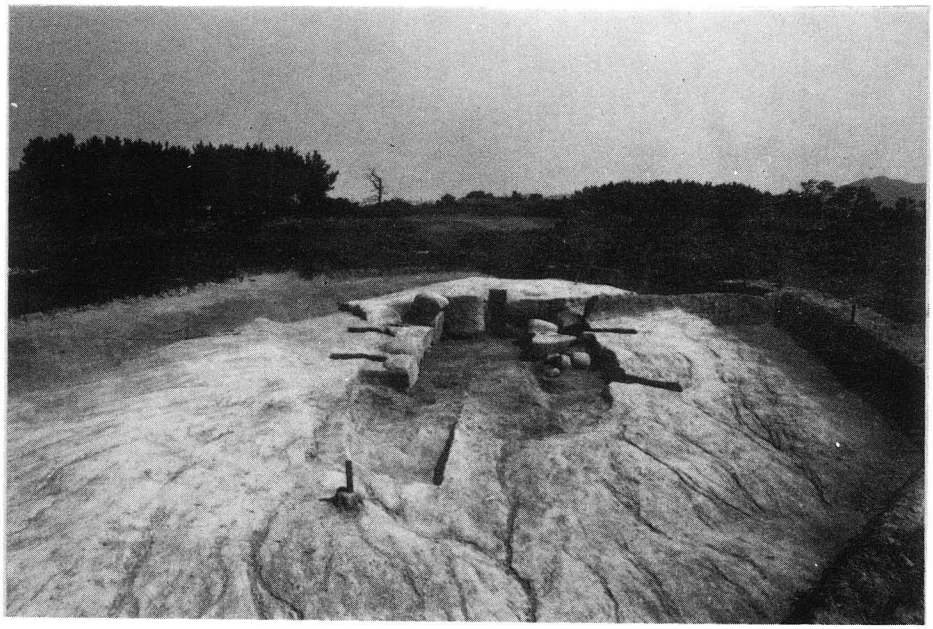
16 1982 勝部昭 [illegible] 『木片子遺跡・木原古墳』[illegible]

17 1983 田中義昭 『石西地方における横穴[illegible]』『山陰文化研究紀要』第23号 島根大学

掘り肩の確認状況

石室検出状況

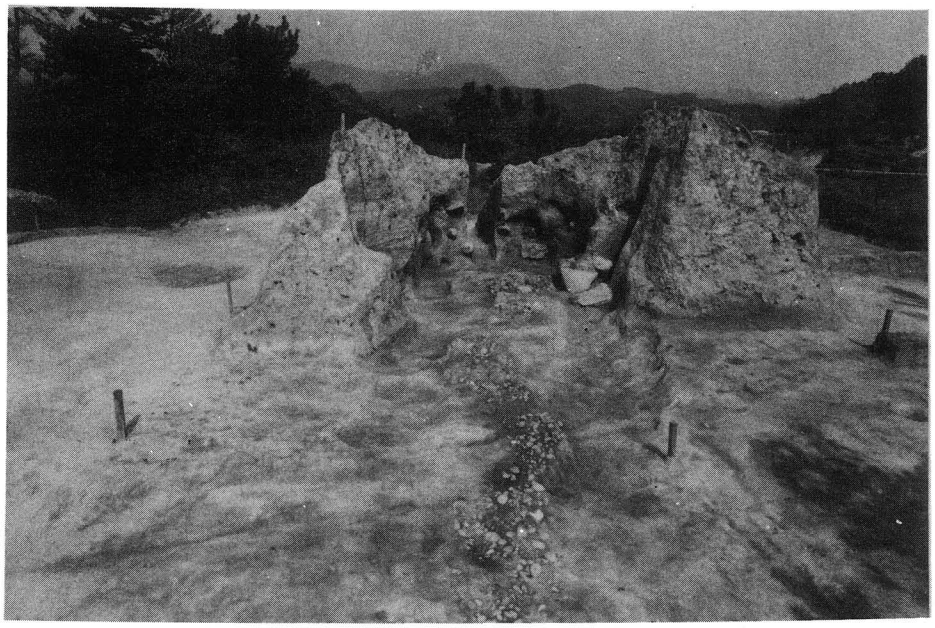
石室内遺物出土状態



調査後全影

調査前全影

調査風景



石室検出状況

石室内遺物出土状態